

兵庫県昆虫類研究史概説(3)

高 橋 寿 郎

明治・大正の兵庫の昆虫研究

明治10年(1877)4月12日東京開成学校および東京医学校を合併して東京大学と改称し、法・理・医及び文学の4学部を置いた。動物学教授はアメリカ人モールズであり、その第1回卒業生が佐々木忠次郎博士である。

日本人による昆虫学研究の最初の発表は佐々木忠次郎博士が明治19年発表された「カイコノウジバエのmicro-type-eggの生活史の研究、(1866)であるとのこと。

日本の昆虫学の基礎を作った人の1人として吾々昆虫学を研究する者に忘れることの出来ない人に松村松年博士がある。明治5年3月5日兵庫県明石郡大明石町東片端に生れるとあるから兵庫県出身の方である。ただ残念なことに明治17年には大阪の川口英和学会へ入学、京都同志社英和学校、東京明治学院予備校を経て札幌農学校に入学(現・北海道大学)、その人生のほとんどを北海道と東京で過ごしたので、兵庫の虫とのつながりは研究論文以外には割合なく、兵庫県下で採集された標本による御自身の研究発表或は当時の札幌農学校、後の東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学農学部等で研究されていた方々による発表の材料として利用された県下産の標本による寄与は可成りある。また松村博士の研究材料を提供されていた人に鈴木元次郎氏があり、その頃各地を採集されていたが、晩年は明石に花園昆虫研究所を開いておられ、私もその頃お伺いしたことがある(昭和15年頃)、その後宝塚昆虫館にもおられたことがある。

兵庫県下の昆虫相を日本人によって一番始めにまとめ発表された人として大上宇一氏を挙げることが出来る。氏の経歴に関しては詳しくわからない。ただ同氏追憶集というのが「兵庫生物、No.4:54~56, 1950, に出ているので、それによると慶応元年生れで在在の地がはっきりとしないが、西播の一隅にかくれてその生涯を博物学の研究にささげたとあり、報文の住所からすれば揖保郡下に住んでおられたのではないかと考える。博物学全般に造詣深くその報文「寄書雑誌誌、なるものが発表されており(兵庫生物、No.3, 1949, No.5, 1951)、多分野にわたる報文が紹介されており、一番古くは明治23年9月の「東洋奇術新報、第3号に発表になったもので大正6年迄研究発表がある。

東京大学が設立された翌年「東京生物学会、が出来、明治15年に植物学会が分離して「東京植物学会、となり、残された方は必然的に「東京動物学会、となった。そしてその機関誌「動物学雑誌、が創刊されたのが明治21年11月である。当時他に未だ昆虫専門誌は発刊されていなかったもので、当然昆虫の記事もこの雑誌に発表された。大上宇一氏の兵庫県の昆虫に関する報文の発表されたのは同誌139号(明治33年5)「播磨蝶類報・播磨網干港の採集、である。それ以前には他誌に害虫関係の報文の発表が若干ある、その後同誌13巻(明治34年)に兵庫県の甲虫相が発表された。

発表されたものは播磨産象鼻虫科、天牛科、金龜子虫科、金花虫科、歩行虫科、朽木虫科(13:155, 156, 157号)の各科で、当時充分な文献もなく分類・同定が大変苦労があったと思われる。従って之等の報文は学名のないものも多く和名だけで記載もないことから現在全部の記録種を判別はし難いが、特に珍しいものはふくまれていないようであるが、兵庫の昆虫の研究が欧米人に依る兵庫を中心とした地点で始り、日本人による兵庫県の昆虫相の研究が揖保郡、佐用郡で始ったことは大変面白く明治迄の県下の文化が姫路から西に開けていたことがうかがえる。

井口宗平氏は佐用郡久崎村の人、明治の終り頃盛んに昆虫採集をされ、それを松村博士のもとに送った。松村博士はそれに基づいて次々と新種を発表されたが、井口氏の名をつけた虫も多い。例えばイグチヒラタカメムシ、イグチヒシウンカ、ウチグロヒメヨコバイ、イグチヒメヨコバイ、ハナダカサシガメ、イグチベニサシガメ、イグチサシガメ等は井口氏を記念して名付けられた虫であり、井口氏の発見した昆虫としてハリマヒメヨコバイ、マヘキヒメヨコバイ、スカシヒメカメムシ、コバネマキバサシガメ等があり、いづれも播磨産のものである。但し甲虫類の記録のほとんどないのが残念である(井口宗平氏;明治18年7月生れ、先祖伝来の百姓、明治37年岐阜市名和昆虫研究所に入り害虫・益虫の研究をすること2年、帰宅後、7, 8年間引続き昆虫採集と研究に没頭し、標本3,000余種をつくる。久崎村の村長に選ばれ一期間在職、昭和32年から同志の協力のもとに「久崎町誌、の編集に着手し同37年刊行、その後ひき続き「佐用

* 兵庫県昆虫相資料, 51.

郡のことわざ集、彦八ばなし、佐用郡俗語方言集、昭和41年には『のじぎく文庫』から『民謡の炉ばた、を出版)。

名和昆虫研究所より昆虫雑誌『昆虫世界』が創刊されたのが明治30年であり、その後50年にわたって休むことなく発刊され、日本の昆虫学の発展のため大いに力のあった雑誌であり、当時の総ての昆虫学者が執筆し、新進無名のアマチュア研究者の研究発表の機関としても広く利用された。

大上宇一氏は再び県下の甲虫相を発表しておられる。即ち明治39年(1906)、『播磨産甲虫類』と題し同誌10巻、112号、1907年11巻、115~118号に299種の甲虫類を記録されている。今回の報文は前回と異り Lewis の日本甲虫目録、松村博士の日本千虫図解、日本昆虫学、動物学雑誌、昆虫世界を夫々参考とした価値ある研究発表となっている。

井口宗平氏も同じ年、同じ雑誌上に数多くの論文を発表しておられる。10巻101号に『アカフチミドリとササナミウドハマキに就いて』を発表され(pp. 34~35)、続き『昆虫雑報1~6』(10巻、106号:247~248、在岐阜とある。108号:333~335、109号:375~377、110号:424~426、111号:461~463、11巻、113号:29~31)、第11巻、121号:418~420に『兵庫県佐用郡産蝶類目録』なる表題で68種を記録。その後佐用郡昆虫目録を12巻、p. 116、158、201、251、291、335、377~1908に夫々発表されている。氏の論文は甲虫に関するものは極めて少く僅に上記昆虫雑報、一に豌豆象虫と豆象虫、亀甲瓢虫(カメノコテントウ)、二、ヒメマルカツオムシ、三、葉捲象鼻虫、五、シギゾウムシ、六、クロウリハムシの記述がある。

芝川又之助氏も明治36年(1903)頃より須磨、甲東村大市を中心に採集研究をしておられ発表もされ、その採集された標本は鈴木元次郎氏が整理し戸沢信義氏が保管しておられたが、1946年宝塚昆虫館に寄贈された。その標本の内容については1936年戸沢信義氏が紫『水遺稿』別巻としてまとめられ産地も詳しく出ている。

この時代に忘れてならない人にルイス氏がいる。ルイス(John, E. A. Lewis, 1862~1938)明治初年来訪、日本の昆虫学、甲虫類の基礎をつくったルイス(前出)とイニシアルこそ違え同じ名であり混同し易いが、このルイス氏はボルネオのサラワク政府官吏として奉職、その後行政官に任命、政府印刷局兼サラワクガゼット編輯長の後警察監獄検閲長官から第一行政理事室、国会議員、同会議書記官となり退官する迄20年間ボルネオの昆虫を蒐集その標本全部を大英博物館に寄贈の後永住の地として神戸をえらんで来日したのは1909年(明治42年)

のことである。神戸市原田に居を構えられて亡くなられる昭和13年(1938)迄神戸を中心として全国を採集され主として甲虫類であるが、採集した標本は夫々専門家に送って研究を依頼され自分ではアマチュアであるからと発表されることがなかったので文献には残っていないが、ルイスの名を学名にとり入れられたのは非常に多くある。また神戸の名をつけられた虫もルイス氏の採集が神戸付近中心だから可成りある。ルイス氏が専門家に送って種名を決定されたものは2,538種以上であると、専門家に送って種名を確定されたものは同じ種の余分個体は送り返してもらっておられるので大変貴重な標本で、日本の甲虫を研究する上に欠くことの出来ない標本であり、死後その標本は京都大学へ蔵書は関西昆虫学会へ寄贈され保管されている。

池長 孟氏は神戸市兵庫の井上家に生まれ、後兵庫の素封家池長 通の養子となった人で、私立育英商業校(育英高校)校長兼校長として後『池長美術館』を開したことで有名な人。

植物、昆虫の採集をして会下山に『池長昆虫館』をつくり昆虫、貝のコレクションを展示された。その後は池長美術館を作る方に発展された。この昆虫館のことは詳しくわからないが、大正6~10年(1917~1921)頃に作られたものようである。

この当時の大変面白い記録が戸沢信義氏の御教示で知ることが出来た(私信)、即ち大正7年頃国鉄(当時は鉄道院)三宮駅(今の元町駅付近)の貨物掛に勤務していた加古川在住の高田千万喜という人が駅構内で貨物から洩れたものを採集された標本並びにその他の地で採集した標本を持参、戸沢氏を訪問された由(その時の標本に基いて野平安芸雄博士が昆虫学雑誌、第3巻、3・4号、1919に短報を発表しておられる)。その中には鳥原で採集されたキベリハムシの標本が数頭あったと(この記録は日本での本種の初めての記録であると考えられる)、駅構内での採集品の中にはダイコクコガネ、外国産の甲虫があり、インド、オーストラリア産らしい標本がありそれらが貨物からこぼれたものであるとのこと、当時の状況から外国産の昆虫が日本に潜入することが可成りあったのではないだろうか(日本に定着出来たかどうかは別として)、従ってこの様な経過でキベリハムシが神戸に定着したのではないかと考えられ大変面白い記録である。尚同氏のコレクションは土地の素封家に譲られた由一部は京都大学に売られたということである。

明治・大正時代の文献は充分見られなかったので、この時代の兵庫の昆虫研究史はこれ以上わからなかった。だが日本の昆虫学の発展も次第に調子をあげてきて所謂昭和初期黄金時代に入った。(10-IV-1975)